

お 春

東京女子高等師範學校教授 岡 田 美 津

二、伯母の代理

お春が河崎村の小學校を卒へて、渡瀬の中學校に入つたころに一つ事件が起こつた。それは古川といふ宣教師が、シリアから河崎村に歸つて來た事だつた。村の教會は、婦人達は三月のある水曜日にその人の爲に會を開いた。あいにく風の吹き荒む寒い日で、降りつもつた雪が地に残つてゐるのに、まだその上に降つて來さうな空模様だつた。田中のおみねもおよねも二人ながら風を引いてゐたので、こんな日に外出は出來ないと思つてゐた。しかし、おみねは、會の役員だつたので缺席するのが心苦しくて朝飯の時にも不機嫌でおよねが自分と同時に風を引いたりしなければいゝのになど、言つた末、お春を代りに出すより他に仕方がないといつた。

「唯も行かぬよりは勝しだらう。およね伯母さんに學校の缺課届を書いて御貰ひ。そしてゴム靴を穿いて歸りには教會の方の道から歸つておいで。なんでもその古川といふ人は、うちの御父さん（お前のお祖父さんだよ）と懇意じ、いつかべんうちへ泊つた事もあるんだから、私達が來てゐるかと思つて探かすかも知れない。御前行つて伯母の代理ですつて言つて挨拶をするんだよ。そして行儀よくしなければなりませんよ。祈禱の時にはちやんと頭を下けて、讚美歌はみんな歌つて……大聲で威張つたやうな歌ひ方でなくだよ。それから、みなさんに伯母達がひどく風を引いたのだといつてね。暇

があつたら會が始まらない、うらにハンケチで樂器の塵を拂つて置き、それから寄附金でも集めるのだといけないから、二十五錢あすこのマツチ箱から出しておいで。」

お春は悦んで承諾した。お春には、村の傳道會なんかでも面白いので、それに伯母の代理になるといふ事は嬉しくて胸が躍るやうであつた。

その集りは、日曜學校の教室で催された。お春が入つていつた時には、古川牧師は演壇の席に着いてゐたが會員は十一二人位しか出席してゐなかつた。お春はさすがにきまりが悪く、年のゆかぬのが特別目に立つので、誰が心易い人はないかと見廻はしたところ、鳥飼のおかみさんが正面近くの横の席にゐたので、中央の通路を進んでその傍へ座つた。

「うちの伯母さん二人とも風を引いてゐるんで私を代りによこしたんです。」とお春は小聲で話した。

「壇の上に旦那さんと一所にゐるあれが古川さんの奥さんだよ。ずいぶん日に焦けてるね。人の靈魂を救はうとすると自分の顔の色なんかの事はあきらめなくちやならないらしい。」と鳥飼のおかみさんが小聲で答へた。

古川の奥さんといふ人は、細りした弱々しい人で、苦勞を黙つて我慢してゐるさうな婦人だつた。着古しの黒絹の着物を被て疲れたやうな顔をしてゐるので、お春は、氣の毒な人だと思つてゐた。鳥飼のおかみさんは、また。

「あの人は、それはく貧乏なのだけれど、他が何が贈るとすぐ施こしてしまふのだつて。あの金時計だつて、みんなが御金を集めて買つて上げたのだけれど、あれだつて、野蠻人、やりかねない。たゞね野蠻人は、御太陽てんとうさまで時刻を測るから時計はいらぬのさ。」

會は始まつた。まづ祈禱があつて、それから古川師はある讀美歌の文句をいつて、

「どなたか樂器を弾いて下さる方がありませんか。」

と出しぬけに言ひ出した。

會衆は互に顔を見合せてゐるばかりで立つ人がなかつた。すると隅の方から「お春さんお弾きよ」と誰だか無造作に聲をかけた。それは幸兵衛のおかみさんだつた。お春は一の曲なら暗闇でも弾ける程によく知つてゐるので、さつさと出ていつて弾いた。伯母さん達がゐないのでお春の氣は樂であつた。

牧師の談話は、例によつて例の如しのもので神の教へが擴まるやうにしたいといふ事、神の道を知らずに居る人々に自分で説きすゝめに出かけられない人は、お金を寄附して、その爲に働く人を援けて欲しいといふ事を述べた。が、この牧師は話し上手の熱心な人なので、談話の中へ、異國人の風俗習慣、言語、思想の事を混せて話してきかせ又、自分の家族の日々の生活振りや、忠實な妻君の働きや、シリアの地で生れた子供達の事までも言ひ添へた。

お春は、別天地の姿をのぞかせられて恍惚となつてしまつた。河崎村は消えてしまひ、日曜學校の教室も、鳥飼のおかみさんの赤いシヨールも、腰掛も、讚美歌の本も、掛けてある聖書の句も地圖もこの子の目に入らなくなつて碧い空強い光の星、白いシリア人の願巾、派手な色彩が見えてゐた。古川師の談話にはなかつたが、お春は、お寺だの光塔だの「なつめ棕櫚」だのがあるのだと考へた。そしてシリアの國で生れた子供達はどんなめづらしい御話を知つてゐるのだらうなどと次の歌を弾いてくれといはれるまで空想してゐた。

寄附金の箱がまはつたが銅貨や十錢銀貨がまばらに入つただけなので、之ではならぬと古川師は、

「どなたか主になつて私共の爲に懇談會をして下さるなら、今晚と明日こゝに滞在しやうと思ひます。その場合に、私の妻と子供にシリアの衣裳をつけさせて御目にかけます。それからシリア人の手細工の標本を御覽に入れたり、シリアの子供達を私共が教へる有様を御話したりしたいと思います。四角張らない集りですと、質問や御話が自由に出來て、案外興味をもつ方が出來るものですが……もしどなたか思召があつて一晩泊めて下さるなら、私共は悦んで滞在して、私共の事業についてなほ委しく申上げますが。」

一座黙りかへつてゐた。どの人にも御客を招けない相應の理由があつたので。明き室をもたぬものもあり、食物の貯への十分でないものもあり。病人をかへてゐる人、見知らぬ宣教師を泊めるのを不賛成な家族のある人もあつた。古川の妻君はもぢくして黒絹の古衣裳を撫でゐる。お春は「だれも何とも言はないのか知ら」と氣を揉んでゐる。すると鳥飼のおかみが首を伸してお春に囁くには、

「宣教師はいつでもお前さんの伯母さんここで泊つたものだよ。お前さんの祖父さんが生きておいでの頃には決して他家へ泊まらせなかつたからね。」

このおかみは、おみねが四つも明き室があるのに「けち」だから泊めはしまいと皮肉のつもりで言つたのだが、お春は、智恵を貸してくれたのだと思つた。「以前からの慣例なら、自分がかうして代理になつて來てゐるからには、此場合伯母さんだつて私が言出すべきだとお思ひなさるだらう。」すべき事が、したいとおもふ事と一致したのでお春はよろこんで立ち上り、可愛い聲で、村の子供達には見られない趣のある態度で、

「あの、私の伯母さん達……田中みねと田中よね……が悦んで御泊め申すと思ひます。宣教師の方をお泊めするのが先代からの例でございますから。伯母達からよろしく申上げるやうにと私言ひ付かつて参りました。」

お春の言ひ方がいかにも重々しいものであつたから、もし伯母達がきいたら恐れ呆れ、おのゝいた事だらうが一座の人達には少なからぬ印象を與へた。田中のおみねはどうしてさう急に心が改まつたんだらう。きつと天國へゆく支度をせつせとしてゐるんだ直と人々は内心思つてゐた。

古川師は恭しく頭を下けてその招待に應じた。會が了つてから、お春は、古川の奥さんのとこへ行くと奥さんは、懐かしげに、

「あなたのとこへ泊めて下さるといふので悦んでゐますよ、五時半ごろに上つたら遲すぎるでせうか、今、三時ですがね

これから停車場へいつて荷物を取つて子供達を連れて來なければならぬです。こゝへ泊るかどうだか分らないので、そこへ預けて來たので……」

お春は、御夜食は五時半だからといつて、幸兵衛の御かみさんに誘はれて一所にその馬車にのつた。お春は興奮して顔が上氣し唇が震へてゐるので歸り途は大方無言であつた。寒い風とおせき小母さん（幸兵衛の家内）の落付いた相手ぶりでお春はやう／＼平常のやうになつて、元氣よく家に入つた。入り口でゴム靴をぬいだりするのがまだる／＼と、マツトを居間へ持ち込んで話をする間中その上に立ちつゝけた。

「お前の靴を暖めて置いたから、話しながら穿いたらよからう。」とおよね伯母さんがいつた。

一三、お祖父さんの孫

お春は話し出した。

「あのね、伯母さん、ごく小人數の會でしたよ。宣教師の人とその奥さんで好い人なの。今夜こゝの家へ泊まつて明日も一日ゝるんですよ。直いでせう伯母さん。」

おみねは編物を膝に落とし、眼鏡を外して……取のほせた時のこの人の癖なので……

「先方でこゝへ來ると言つたのかへ。」

「いいえ。」とお春は答へて、「伯母さんに代つて私が招待しなくつちやならなかつたの。でも、あんな面白い御客様が來たら伯母さんもいやぢやないだらうと思つたんですよ。まあ、こうだつたの……」

「一寸、話はあとにして、何時こゝへ來るんだかそれを先に御きかせ。今ぢきにかへ。」

「まだ二時間は大丈夫來ませぬよ……五時半頃。」

「それぢや話すがいい。一體誰の許しを受けてお前は知りもしない人を一晩泊めるといつたのさ。此家では二十年を御客を招んだ事はないのをお前だつて知つてゐるのに。これから後の二十年だつて御客を招びはしないよ……とにかく私がこの家の主人であるうちは。」

およねは、

「まあ話をよくきもしないで、叱つたていけないでせう。私達が今日の會に出たら、そんな事になりはしないかと私始めから思つてゐました……古川さんはうちの父さんと心易かつたのだから。」

お春は談をつゞけて、

「少人數の集りでしたよ。伯母さんの言傳をみなさんにしたら、それは残念だといつてゐらつしやいました。會長が缺席なので、松田の奥さんが代つて會長の椅子に着いたんですけれど、御氣の毒だわ、ねあの肥つた身體からだに椅子が小さすぎで。古川さんの御話は神様を知らないシリアの人の事で、面白かつたの。そして讀美歌も、まく行つたの。それから寄附金の箱がまはつて來た時に見たら四十錢位入つてたらしかつたんです。それつばかりではシリアの赤ん坊一人だつて救へませんね。それから古川さんが、どなたか懇談會を開いて下されば今晚泊つて明日此河崎で集りをして奥さんにシリアの服装をさせたり外國の奇麗な品物を見せたりすると仰つたのです。でも、いくら待つても待つても誰たれれも何とも言はないで、私も困つてしまつて、どうしようかと思つたの。したら、古川さんがまた同じ事を繰返して言つて、河崎に一晩泊りたい譯を御話しなすつたの。それが自分の義務だと考へていらつしやるらしいのがよく分るんですよ。その時ね、鳥飼の小母さんが小聲で私に、お前さんのお祖父さんが生きてお出の頃は、宣教師は田中の家で泊つたもので、他所へなど泊らせなかつたといふの。私伯母さんが御客をなさらなくなつたのを知らなかつたんですよ。だつて私が此村へ來てから旅から歸つた牧師さんなんか一人も來た事ないんですもの。それだもんだから、私、古川さんを御招きしければわるいの

かと思つてね。伯母さんはお自分で招待なさる事が出来ないし、私に代理をするやうにと仰つたんだから。」

「お前どんな風にしたのさ……皆が歸りかけた時に出ていつて名告たのかへ。」

「いゝえ。會の最中に私立つて言つたの。あんまり誰も何とも言はないので、古川さんが氣を悪くしかけなすつたので。

私かう言つたの（私の伯母達……田中みねと田中よね……は悦んで御泊め申します。先代の時からの例になつてゐますから。伯母達からよろしく申し上げるやうにと申付かつて來ました）とそれから私が席に着くと、古川さんがうちのお祖父さんの爲に御祈りをなすつてお祖父さんの精神がその子孫に傳はつてゐるのを感じするツて仰つたの。」

之をきいて田中おみねの心は動いた。一體この女の魂の門は永年閉め切りになつてゐた。一べんに閉まつたわけではな
く段々々に當人もよく知らぬ間に閉まつたのであつた。だからお春がありつたけの智慧を振つて、幾日々々もかゝつて
策略をしたつて入場謝絶の伯母の心に入つてゆく事は出来なかつたらうが、今は、伯母も知らずお春も心付かぬまに、魂
の門がゴチ／＼に錆ついた蝶番てつぱんに沿ふてギユウと開いて「好機」といふ風に押され／＼て次第に廣く明くやうになつたの
だ。おみねは自分の幼い時の事を思ひ出し信心深い尊い父の生活を回想した。「あの頃の田中家は他に立てられ崇められた
ものであつたが、今日のお春は田中功藏の孫娘として恥づかしくない振舞をしてくれた。して見るとこの兒は萬更近藤家
の血ばかりでもないらしい。」と考へて心が和らぎ機嫌がよくなつた。もつとも此女のことだから心の悦びを素振すぶりに出しも
せず、またこんどの招待は先例になりさうだとの感じを他にもたせもしなかつた。おみねは、

「分つたよ……お前も仕方がなくてそう言つたのだろ。招待の文句は、お前、上手に言つたね。私もおよね伯母さんもち
んなに風を引いてゐないといふんだが、しかし家が清潔せいせつで不要の室でもよく片付いてゐて、食物もたつぷり煮焼してある
御蔭で、いざといふ時に驚く事もないし、人に誹くされることもない。今日の集まりに來た人の中で、古川さん達を造作も
なく御馳走の出來る人達が五六人は居たのにさ、みんな「けち」で不精だからいけない。御客さんは、何故お前と一所に

來なかつたのだへ。」

「停車場へ荷物と子供を取りに行つたんです。」

「え、子供が居るの。」とおみねは唸いた。

「そうなの。シリアの空の下で生れたんですって。」

「やれまあ、幾人ゐるのさ。」

「つひ尋きませんでしたよ。私二つ室を用意しておきませう。それで足りなかつたら、餘つた子を私の床に入れてやるわ。」とお春は内心そうだといひと思ひながら「伯母さん達は半病人だから、こんどだけ御願ひ！ 私に御客さんの支度をさせて下さいな。伯母さんて呼んだら二階へ見に来て頂戴。ね、いゝでせう。」

おみねは溢々、

「そうしようかね。私や、およねの傍で少し横になつて御夜食の支度をする時まで休んで養生をしよう。今三時半だね……五時になつたらすぐ起こしておくれ。臺所に火は起こしてある。私や、何ていふ事もなく豆を煮ておいたが丁度間に合ふね。お春二階の南の室を二つ支度をしてお置き。」

お春は、生れて始めて思ひ通りにする事を許されたので、旋風のやうに二階に驅け上つた。この家はどの室も清潔此上なしなのだから、お春は窓の日除けを押し上げて床に簞をかけ、椅子や寢臺をはたく丈であつた。伯母達の耳にはお春が走りまはつて枕をドン／＼脹らしたり、タオルをバタ／＼振つたり、洗面器をガチャ／＼言はせたり澄んだ聲で歌を唱つたりしてゐるのが聞こえてゐる。

お春は、大分間に合ふやうな子になつて居た。自分に出来るやうな仕事は、すばしこくしてしまふので、五時頃、伯母達に檢分してくれと聲をかけた時には、あつといはせる程の事をしてあつた。手拭かけには新しいタオルが掛けてあり、

寢臺は敷一つないやうに奇麗になつて居り、水差しには水が一杯い入れてあり、石鹼もマツチも揃へてあつた。新聞紙と焚付けと薪が箱に入れてあつて、大きな薪が暖爐ストーブにゆるやかに燃えてゐた。

「熱い國から来た人達だから、この室を暖めて冷氣ヒュームを去つた方がいゝと思つて。」とお春は説明し「あ、それで思ひ出したお客が来ないうちに地理の本でシリヲを見て置かなくては。」

不都合の個所がないので伯母達は階下へ着物を改めに降りていつた。客間の前を通ると中で火がバチ／＼燃えてゐる音がするので覗いて見ると窓の目除が押上げてあつて表座敷の暖爐にも裏座敷の爐にも赤々と火が焚いてあつた。お春のランプが……アラデンさんの贈物だが……上が大理石になつてゐる卓の上に据えてあつて、桃色の傘から漏れる光りが無趣味な陰氣なこの室を居心地の宜さうな、地ひたと親しくなれさうな室に變へて居た。おみねは、二階へと聲をかけて、

「お春や、お前御客間も使ふんだと思つたのかい。」

お春は髪ゆを結びながら階段たきざんの踊場に出て來て、

「感謝祭やクリスマスマスの時に使つたでせう。今日のはそれ程の場合だと思ふんです。私ね、爐棚の上にあつた蠟細工の造花を熔けないやうに他へ移してね、只殻かだの珊瑚さんごだの緑色の剝製の鳥だのを棚の上にかけてしまつたの……子供達が玩具にしたがらないやうに。三池の小父さんが何か用で古川さんに逢ひに來るんですよ。それに幸兵衛さんもあそこの小母さんも來るかも知れないの。伯母さん、地下室へいらつしやらなくてもよいわ、私今すぐ行きますから。」

おみねとおよねは顔を見合せた。おみねは、

「まあ、何ていふ子だらう！ 氣が向くとやるにはやるね。」

五時十五分前に何もかも用意が出來た。近所の人遠くの煉瓦家の見える家々の人達は死にさうに好奇心に咬られた。客間の目除が外してあつて、二階の寢室も目除がとれて！ 見る眼に偽がなくなれば火が家中の室に焚いてあるらしい！ 集ま

りに出席した一婦人が御せつかいにも一二軒の家を訪れて、田中の家のざわめきの理由を説明しなかつたらあやまりの不思議にこの晩眠れなかつた連中が多かつた事だらう。

宣教師の一行は、時間通りに着いた。子供は二人だけであつた。あとの子供は旅費を節約するために途中に預けてあるのだつた。およねが御客を二階に案内すると、おみねは食事の支度をした。お春は、早速二人の女の児を連れて行つて、外套を脱がせ、頭髮を撫じつけてやり、それから襦袢所へ連れて、来て豆の匂ひを嗅がせてやつた。

夜食には、食物が豊かだつた。それに子供達が居たので四角ばつた窮屈の感じがなかつた。およねが茶の間のあと片付をし、おみねが客間で相手をしてゐると、お春と古川の子供は御皿を洗つて臺所で大騒ぎをして、たいした失策ではないが前からひひの入つてゐる茶碗と皿を破はし、銀の匙をごみの中へ捨て「流し」に茶がらを流しこんだりした。お春はかうした罪跡を體よく始末して子供を連れて客間に來て見ると、幸兵衛夫婦と三池といふ人とが訪ねて來てゐた。

非常に愉快な集りだつた。時々話シリア人教化の事から外れていつたが、古川師は珍らしい美しい不思議な事を澤山談りきかせた。子供二人は合唱をし、お春も古川の妻君に勧められてガタ／＼ピアノに合せて、勢よく一曲歌つてきかせた。

八時になつた時、お春は、おみねに棕櫚葉の團扇を渡した。ランプの火光がその眼に障らぬためだと言ひながら、實はその蔭で「御菓子を出しては如何でせう」と小聲で尋ねるためたくらみだつた。おみねも、ヒソ／＼聲で、

「その方がいゝだらうかね。」と言つた。

「金子のうちではいつでもさうしますよ。」

「そんならそうおし。どこにあるかお通知つてゐるだらう。」

お春はそつと戸口の方へ行くと、古川の子供は五分でもお春から離れては居られぬといふ風にあとを追つた。やがて三

人で戻つて来た……子供は、ハートやダイアやまん丸の御煎餅に砂糖のかゝつたのが入つた皿を持って。この煎餅はおよねが専門の菓子なのであつた。お春は六個のコツプに「たんぼ酒」を注いでそれを盆にのせて運んで来た。かうした御馳走を一同が行儀よく食べてしまふとお春は時計を視て子供達の中から立ち上つて、元氣よく言つた。

「さ、ちい宣教師さん達は、寝る時間ですよ。」

みんな笑ひ出した。……とりわけ大宣教師が。子供達は大人達に挨拶をしてお春と一所に客間を出た。

お春が行つてしまふと古川師は、

「あなたの姪御さんは、ずいぶん珍しい御子さんですな。」と言つた。

「この頃は可なり氣が利いて來ましたが、どうも不注意でして、それに元氣があまりすぎて困ります。」とおみねが答へた。

「いや一番困ることは、活氣がありすぎるのでなく無さすぎる事です。」

「あの聲、と人を惹付ける力、それからあの辯舌ですもの立派な宣教師になれますよ。」と古川の妻君が言つた。

「さあ、宣教師によいか、異教者に適いかといへば異教者の方があの子に似合ふでせうよ。」とおみねは無愛想にいつてのけた。

古川の妻君が呆れたやうな顔をしたので、およねは大急ぎで、

「姉は、子供を責めるのはよくないと思つてるのでございますよ。」と口を出した。

談話が面倒になりさうなので、幸兵衛の御かみさんは、河崎村からシリアへ行くには幾度乗り換へがありますかと訊き出した。自分でも折に適つた質問だとは思はなかつたが、話題を變へさせる効能はあつた。

三池といふ人がおみねに對つて、

「おみねさん、お春さんを見ると、わしは思ひだす人があるがね。」

「誰だか推して見やうか。」

「ぢやお前さまも氣が付いてるな。お春さんは親父さん、そつくりだから御腹ン中までもさうかと實は考へてたが、さうでないよ。田中功藏さんに似てゐるんだ。」

「それや、どうしてなのさ。」とおみねは驚き切つて尋ねた。

「先刻ね、集りの時にあの子が立ち上がつて御泊め申すと言つた時にそう思つたんだ。不思議な事にや、功藏さんがよく掛けなすツた椅子にお春さん座つてたんだ。それ功藏さんが立つて何か言ひなざる時に、頤あごをすこし上あは向けて、頭を心もち、そらせなすツたらう。あの通りにお春さんがやつたんだ。それに氣が付いたのはわし一人ぢやありませんよ。」

訪問者は九時前に歸り去り九時にはみんな床に就いた。

………

お春は翌朝六時前に目が覺めた……用事が澤山あると思ふと氣になつて眠つてゐられなかつたのである、窓のとこへ行つて外を見ると、まだ暗くて、その日も風の騒がしく吹き荒れる日だつた。

「およね伯母さんは、六時半に起きて七時半にお飯にすると言つてらしツたが、伯母さん達は二人とも風邪で氣分がわるいんだわそしておみね伯母さんはお客が大勢ゐるんで、氣を揉んでらツしやるだらう。私そつと階下したへ行つて御飯の支度をしかけて、着かせてやらう。」

お春は丹前を引かけて、そつと昇降禁止の表階段を降りて臺所へ行き、戸をびつちやり閉めて、福音が伯母達にきこえないやうにし、よく知つてゐる朝の用事をやり出した。三十分後には自分の室に戻つて着物を着換へ、それから子供達を起こさうとしてゐた。

およねは、前夜はおみねよりも容體が好かつたのに、夜の中に悪くなつて、今朝はとても床を離れることが出来さう

もなかつた。おみねは身じまひをしながち、のべつに口小言をいつてゐた。自分のうけた昨夜からの迷惑今日一日我慢しなければならぬ迷惑を誰のせいだ、彼れのせいだと當り散らして、「一體古川家の人をシリアに派遣した傳道會が不都合だ事の不信者を救ひに異國へ行く人は自國にゐておのれを救ふべきで、そろ／＼子供を引き連れて世界中を遊びまはつて頼みもしない人の宅へ押しかけてくるもンぢやない」ことのこと罵つてゐた。

およねは、頭痛に悩みながら、姉が一人では困るだらうと床の中で案じ煩はつてゐた。

おみねは風に當らぬやうにと、シヨールを頭から被ぶつて、ツン／＼した態度で茶の間を通りぬけて臺所へと行つた。火を起こして置いてからお春を呼び起こして用を言ひ付け、そのひまに伯母の代りに傳道會へ出席する時の心得を言つてきかせやうと思つてゐたのであつた。彼女は、戸を開けてさて、茫然と見渡した……間ちがへて他家の臺所へ入つたぢやないかと思つたのである。窓の日除は上にのけられ、竈には火がドン／＼燃えてゐた。藥鏝は音を立て、盛に湯氣を噴いてゐて、その口の邊に「御早う春子」とかいた紙片が挟んであつた。コーヒー瓶は火傷しさうに熱くなつてゐてコーヒーは分量が計つて傍に置いてあつた。馬鈴薯とコンドビーフは盆の上に載せてあつて「御機嫌よう春子」といふ紙片が肉切りナイフに突刺してあつた。パンの塊も出てゐるし焼パンの串も出てゐるし、ドゥナツでも出てゐるし牛乳も抄すくつてありバタも取出してあつた。

おみねは頭からシヨールを除つて、ありあふ椅子にドカリり腰を下ろして、小聲で、

「あの子にはかなはない！ 事ばれない田中の血統すけだ！」

此日は誰もかれも立派にやつてのけた。およねまで病氣をわるくしてみんなの興を殺ぐやうの事をしないで氣を利かして快くなつてしまつた。

古川家の人達は名残惜しげに別れ去つた。ちい宣教師達は、泣きながらお春にかはらぬ友情を誓つて去つた。お春は、

朝食の前に作つて置いた歌を餞別にと子供達にやつた。

これで田中おみねが生れ代つたやうな人間になれば結構なのだが、實際そうはいかなかつた。二十何年とかいつて歪み捻じた樹がまたしく間に眞直になるわけはなかつた。もつとも心の變化は眼に見えぬ程ながら起こりつゝあつたのは確實で、お春に對しておみねはよほど扱ひをゆるやかにし、悪意に解釋する事をつゝし、終局には善良な娘になるだらうと望みをかけるようになつた。これはお春があゝの輕侮すべき近藤家から身體も精神もうけ繼いだのでなく、田中の方からも受繼いでゐるものがあるといふことが急に分つたからであつた。なんでも、お春のよい點は田中の血から來たものと信じ、おみねは誇りを感じた……丁度腕利の技工が「ものになりさうもない」材料を使つて美事の作品を製り出した時の得意さのやうなものであつた。しかし此女は最後……身體の力が弱つて抑制が十分出來なくなつた……まで一度だつて、その誇りを見せた事もないし可愛いゝとの表現をした事もなかつたのである。